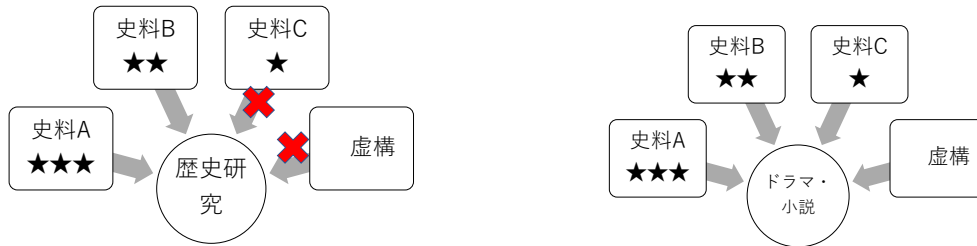


吾妻鏡とは何か

1 歴史研究と史料

・歴史研究とドラマ・小説とでは、過去の様子を復元して描く際に、信頼できる証拠（史料）だけに基づくか、たとえ信頼できない史料でも面白ければ採用したり、虚構（フィクション・嘘）も加えたりするか、の違いがある。



・史料批判とは・・・史料の性格を明らかにして、信頼度を判定する手続き。いつ、誰が、何のために書き残したのか。

2 吾妻鏡とはどのような史料か

・鎌倉幕府と都市鎌倉を中心とした鎌倉時代のできごとを、年月日の順に記した歴史書。関係者の日記や古文書などのさまざまな資料（原史料）をもとに、ややのちの時代に編纂した（まとめた）もの。

・治承4年（1180）の以仁王の挙兵から、文永3年（1266）の前將軍宗尊親王の帰洛までの87年間の記録。鎌倉時代約150年間のうち、ほぼ前半をカバー。

・鎌倉時代前期の鎌倉幕府周辺に関する、唯一のまとまった史料。同時期の幕府のことが出来るほかの史料には『平家物語』『曾我物語』『承久記』などの軍記物があるが、文学作品であるため虚構が多い。古文書や『玉葉』『明月記』などの京都の公家の日記は、鎌倉から離れたところで記述され、断片的な記述しかない。

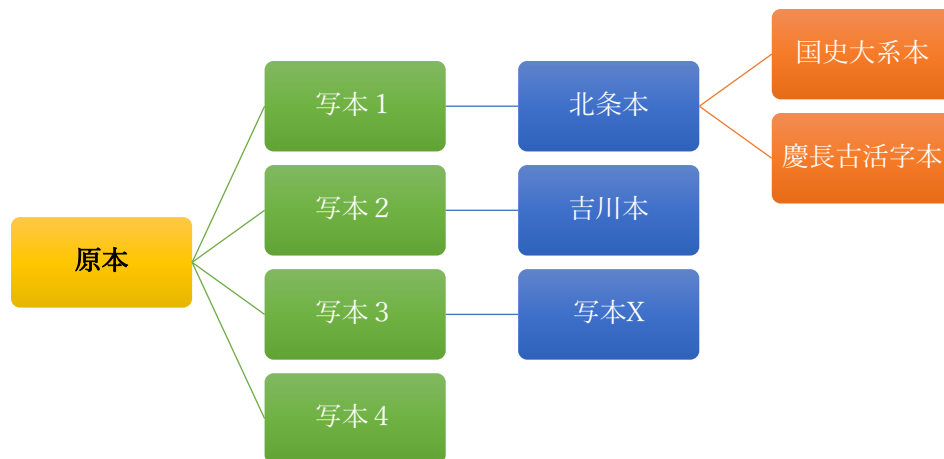
・いつ、誰が編纂したのか・・・明確な結論は出ていない。さまざまな状況証拠から、鎌倉時代後期の13世紀終わりから14世紀初めにかけて、北条氏一族の金沢氏や幕府奉行人の大田氏などが中心となって編纂。

・どの程度信頼できるのか・・・鎌倉幕府の中枢にいる人物が、幕府関係者の日記や古文書などを集めて編纂したと見られ、幕府や東国関係の記事については信頼度はかなり高い。京都や朝廷についての記事は量が極めて少なく、伝聞のみに基づく部分も大きく、信頼度は相対的に低い。御家人のなかで北条氏だけには「北条殿」「江間殿」などの敬語表現が使われ、北条氏の立場を特

別視していることから、北条氏関連の記事の信頼度はいくらか下がる。

・ 原本（オリジナル）は失われ、いくつかの写本（コピー）が伝来。現存している最古の写本は戦国時代に成立したもので、そのうち「北条本」は全 52 巻、「吉川本」は全 47 巻。

・ 原本と写本の関係（あくまでも単純化してモデル化したもの）



・ 現存する写本の種類

【北条本】江戸幕府の所蔵を経て、現在は国立公文書館の所蔵（国指定重要文化財）。小田原北条氏の所蔵と伝えられ、「北条本」と呼ばれる。江戸初期に徳川家康の命で出版された「慶長古活字本」も、北条本に基づく。現在もっとも広く普及しているテキストは、吉川弘文館刊行の『新訂増補国史大系 吾妻鏡』で、北条本を基礎としている。国史大系本を読み下しにしたものが『全訳吾妻鏡』（新人物往来社）、現代語に訳したのが、『現代語訳 吾妻鏡』（吉川弘文館）。

【吉川本】戦国大名大内氏の家臣・右田弘詮（みぎたひろあき）が収集した写本。右田氏から毛利元就を経て吉川家に伝わったと見られる。現在、吉川史料館（山口県岩国市）所蔵（国指定重要文化財）。北条本に比べて、誤写や脱落が少ないと見られるが、これまでは良い活字のテキストがなかった。近年、吉川本の活字版として高橋秀樹編『新訂 吾妻鏡』（和泉書院）全 10 冊が刊行開始。現在、5 冊が刊行済み。

・ 全巻の構成 ・ おおよそ将軍ごとのまとまりを持つ。

源頼朝 治承 4 年（1180） 4 月～建久 6 年（1195） 12 月 巻 1～15（北条本の巻数）

源頼家 正治元年（1199） 2 月～建仁 3 年（1203） 9 月 巻 16～17

源実朝 建仁 3 年（1203） 9 月～承久元年（1219） 3 月 巻 18～24 の途中

藤原頼経 承久元年（1219） 7 月～寛元 2 年（1244） 12 月 巻 24 の途中～巻 35

藤原頼嗣 寛元 2 年（1244） 5 月～建長 4 年（1252） 2 月 巻 36～41

宗尊親王 建長 4 年（1252） 1 月～文永 3 年（1266） 7 月 巻 42～52

将軍の代替わりの部分には混乱がみられる。巻 24 の途中で実朝から頼経に記事の中心が代わり、その間に 3 ヶ月分の空白。頼経・頼嗣交代期では、寛元 2 年 5 月～12 月の記事が巻 35 と巻 36 とに重複して記載。しかも、同一の事件について違った記事が記されており、編纂の担当者

が違っていた可能性。頼朝・宗尊親王交代期、建長4年1月の記事が巻41と42の両方に。

・欠落部分の謎・『吾妻鏡』は途中で記述が抜けている（12年分）。源頼朝の死去、北条泰時の死去などの重要事件が含まれる。欠落が生じた理由は

- ① 元々は存在したが、写しを重ねるうちに失われ、現在は伝わらない。
- ② 北条氏にとって都合が悪い部分（暗殺や陰謀などの後ろめたいこと）があるので省略した。
- ③ 編纂が困難で未完成に終わった。
  - ①→いくつかの系統の写本が伝わる中で、同じ年の分が共通して脱落するのは不自然。
  - ②→宝治合戦などでは、北条氏に都合が悪いことも隠さず記述している。

よって、③の可能性が高い。

### 3 『吾妻鏡』を読んでみよう！

・和風漢文というスタイル。中国の漢文を日本風にアレンジ。

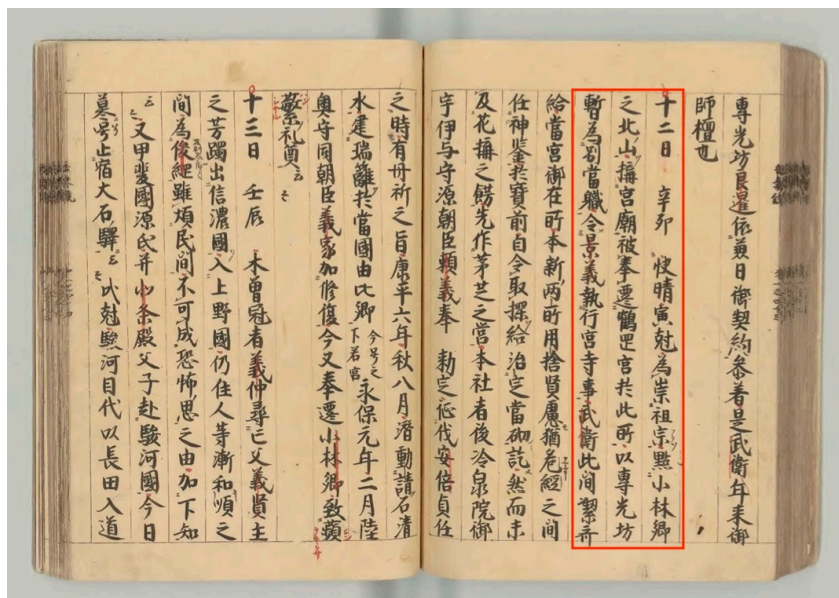
たとえば・治承4年（1180）10月12日条

「十二日。辛卯。快晴。寅刻。為崇祖宗。点小林郷之北山。構宮廟。被奉遷鶴岡宮於此所。以專光坊暫為別当職。令景義執行宮寺事。」

・読み下しにしてみると、

「十二日、辛卯（かのとう）。快晴。寅刻、祖宗を崇めんがため、小林郷の北山を点じ、宮廟を構え、鶴岡宮をこの所に遷し奉らる。専光坊をもって暫く別当職と為し、景義をして宮寺の事を執行せしむ。」

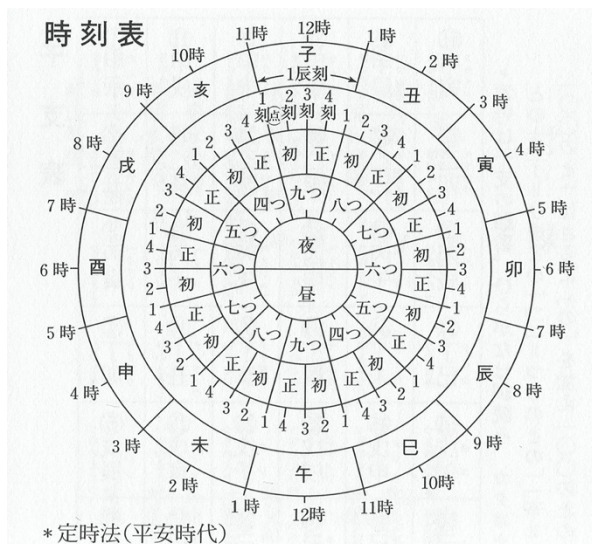
原文では句読点はない。北条本の写真で見ると・・・



・現代語訳にしてみると・・・「辛卯。快晴。（頼朝様は）寅刻（午前4時ごろ）、先祖を敬うために、小林郷の北山に社殿を建て、鶴岡八幡宮をその場所にお遷しなされた。専光坊（良暹）をしばらくの間の八幡宮寺の別当職に任じ、（大庭）景義に八幡宮寺の事務を担当させた」となる。頼朝や北条政子、歴代の将軍などが主語となる場合は、主語が省略されることが多い。

・少し解説を加えると・・・もともと鎌倉には、源頼義が石清水八幡宮を勧請した八幡宮が浜の近くにあったが、頼朝は鎌倉中央部の北端の山（現在の八幡宮の場所）に遷して祀った。専光坊は伊豆走湯山の僧侶で頼朝とも旧知の間柄であったので、呼び寄せて仮の別当に任命。二年後に、三井寺から円堯が招かれ、正式に初代別当に任命された。

・天気や時刻・・・書かれていないことも多い。書かれている場合は、誰かの日記を引用して編纂した可能性が高い。



＊参考文献

五味文彦『増補 吾妻鏡の方法—事実と神話に見る中世—』（吉川弘文館、2000年）  
 菊地大樹『吾妻鏡と鎌倉の仏教』（吉川弘文館、2023年）  
 五味文彦ほか編『現代語訳 吾妻鏡』全16巻・別巻（吉川弘文館、2007～2016年）  
 西田友広『ビギナーズ・クラシックス 日本の古典 吾妻鏡』（角川ソフィア文庫、2021年）

＊原文を読む時の道具として・・・

御家人制研究会編『吾妻鏡人名索引』（吉川弘文館、1971年）  
 安田元久編『吾妻鏡人名総覧』（吉川弘文館、1998年）